

## 「第 1 回中国圏広域地方計画学識者会議」要旨

## ●産業の観点

■伊藤 中国地方の一世紀後の人口は 300 万人から 400 万人になるかもしれない。それでもヨーロッパの中堅国並みの人口だ。これをいかに養うか。機械産業だけでなく、陶磁器やアニメーションなどの高度でこだわりのあるものづくりに力を入れ、維持していくべきと思う。地域の伝統や文化の中に世界に通じる新たな産業の芽がある。

■戸田 経済活動において、中国地方は全国で最も開放的なブロックではないだろうか。いわゆる「ものづくり」で儲けており、その儲けで高次のサービスを周りから買っているのが現状で、新たな産業を育成して自立的な内部循環を高める取り組みの必要性を感じる。

■岡本 商業、なかでも物流に着目すると、卸は小売と違って人口とはあまり関係がなく、やり方によっては大きく伸びる可能性がある。例えば思い切って保税期間を長く設定した韓国の釜山には、全世界のモノが集まっている。そうした機能を中国地方で持てないだろうか。特に東アジアでは使用済みの製品や廃棄物を輸送する「静脈物流」が遅れており、地の利のある山陰は拠点化実現の可能性が高い。また、中国（China）の中小都市（100 万都市）との連携を図ることを考える必要がある。

■道上 北東アジアを視野に置いた新たな日本海国土軸構想を進めたいが、それには山陰に産業を興さなければならない。産業の育成による雇用確保は最大の課題でもある。一つには地域資源に磨きをかけた広域観光。それを実現するための高速交通ネットワークの整備も急務だ。また、山陰のエンジンになる都市づくりとして、例えば自然環境を生かした健康福祉都市を打ち出し、機能性食品や健康増進器具開発といった健康・福祉にかかわる産業を育成していくことが一つの道として考えられる。

■大場 先進国では第 2 次産業が衰退して、高付加価値、つまり専門家が需要とされる第 3 次産業にシフトしつつあるが、中国地方では専門家を育てる高等教育機関も、仕事場も少ない。地方都市に高等教育機関が少ないため、いい人材を東京で教育させ、そこで職に就かせる従来の典型パターンでは地域の産業も次の世代も育たない。これからの時代は知識集約のための地域戦略や国境を越えた人材確保が必要だろう。中山間・島しょ部地域のブロードバンド整備の遅れは、次世代の育成という点で非常に大きな問題だ。

■中村 中国地方は特徴がないのが一つの特徴で、全体としてもう一つ存在感が希薄。大都市圏とは違う地域の多様性や中国圏域独自のものを、どのように創出していくかが課題だ。また、さまざまな形で地域の資金が漏れたり、不必要に他地域に依存しているものを地域が自立性をもって循環していくべきだ。例えば地産地消も一つの経済循環といえる。さらに中国地方の最大の課題は、対岸の四国地方、つまり本四架橋をいかに有効に利用していくかだ。

■小川 中山間地域の経済をリードするのは農林漁業だが、従来の産業分類で考えている限り将来はない。しかし農林漁業は地産地消やツーリズムのように、何より「現場」を生かす産業としての力を持っている。今後はアメニティー機能や福祉的機能といった多面的な機能を新たな産業として立て直す取り組みがあつていい。

■古川 日本で使われている木材の80%は輸入材。本来なら国産材でまかなえるのに、高いから使わない。十分な資源と生産力のある山をどう生かすかは大きな課題。増える分だけ使えば木は永久に生産できるもの。サステナブル（継続的）な思想で国産材の利用を促進したい。また森林のもつ癒やしの効果も見逃せない。中国地方の山林は多くが私有林。固有財産への働きかけは難しい問題だが、積極的に森林を活用しようという動きが生まれれば新しい産業への一つの道筋となりうる。

## ●中山間地や都市の再生といった観点

■作野 中山間地域は過疎化により社会生活が成り立たない社会的空白地域から、集落が消滅する人口空白地域になってきた。集落単位の人口増減率・高齢化率からみると中国山地の奥まった集落より、世羅台地や吉備高原など台地上に位置する集落の過疎化が今後問題になると考えている。どうしても消えゆく集落はあり、集落からの撤退もやむを得ないかもしれないが、最後まで看取る「むらおさめ」といった考え方が必要。一方で中山間地域には都会の人を中心に、流入者が多数みられ、集落が存続していく可能性も残されている。農地を求める人への耕作放棄地の提供など土地と人の流動化を促進したい。

■藤山 持続可能な国土形成を本気で考えるなら、中山間地域は先行地域。そう位置付けた上で、生産の再構築や外部に分散しつつある山林の新しい所有の形を検討していきたい。また、計画立案には詳細なデータが不可欠。GIS（地図情報システム）のデータセンターのモデルを中国地方から提唱・実践していきたい。

■谷口 持続可能性とは何か。地域に何かを起こす時によく使われるが、それが本当に持続可能かどうかという議論はどこかに置いている。そのあたりを根本的に見直さないと、他の地域に先んずるような計画はできないと思う。

■藤井正 もう一つ、議論しておくべきテーマとしては、これからの人口減少の社会を受けとめるフレームワークになるような、県域を越えた都市や農村中心地のネットワーク構築。中国地方の分散的な構造を活かし、中枢都市からそれに結びつく小さな集落までそれぞれの個性をつくりネットワーク化する。最も大事な点は都市と周辺の農村部あるいは中山間地域が一つの生活の場、生活圏としてユニットとして機能分担するということ、それが広域にまたがって体系的に機能分担できることである。

■藤井大 中小都市と中山間地を結ぶ交通や通信ネットワークは、短時間で効果的な観光の実現、PR要素にもつながる。

■折登 街が街として機能するために不可欠な条件は、生活居住空間としての持続性だ。その達成手段としては、住民が協働し、地域づくりの主役・主体となることが大切。計画策定にも住民が参加し、計画の合理性を確保する必要がある。もう一つは公共性。公と私の内容の検討のほか、その中間的な地域共通の利益についても細やかな目配りと抽出が必要だろう。

■戸田 生活圏という観点でいえば、最も危機的な状況なのは中核都市や中山間地域より、それを支える中小都市であることを認識すべき。都市の分散的配置は避けられないが余暇、福祉、健康など生活産業がそのまま経済発展につながる仕組みづくりが必要だ。

■杉恵 私も都市の再生、特に中心市街地の再生が非常に重要なテーマだと感じる。買い物だけでなく娯楽、文化の中心としてもう一度再構築していかないと、地域全体の発展はない。しかも、費用を余り掛けない都市の活性化ということが一つの大きな課題だろう。

■小川 中国地方全体としては、地域特性を生かした生産性の高い産業の育成とそのための基盤整備が課題。もう一つは持続可能なコンパクトな暮らしの実現を、都心部でも郊外でも、中山間地域でも考えるべきだと思う。

■折登 中山間地と都市部の共通課題として、ソフト＝人の活力や質的レベルアップをどう図っていくかという点もある。

■八田 新しい地域社会像を考えるにあたっては、まず本当の意味での地域活性化とは何かを議論し、守り生かすべき個性・固有価値とは何かを見極め、それを核とした内発的な発展をイメージしたい。伝統的な文化だけではなく、現代アートなどの新しい文化の発信も含めて、文化の力を使っての地域活性化も考えられると思う。また中国地方の一体感の醸成、圏域にとらわれない各アクターの連携強化は欠かせない。

## ●観光・暮らしといった観点

■藤井大 21世紀は旅の時代と言われ、非日常的な空間で何らかの満足を得る、広義な意味での旅の重要性が高まってきている。そんな時代に応じ、中国地方では自然や住環境を生かして「容（受け入れ）の地域づくり」をしてはどうか。中山間地域が自立し、地域力を鍛え上げていくために有効な手段であり、住民ホストによる受け入れは新たな公の分野を地域に広げていくのに役立つだろう。さらにはシームレスアジアの実現にも高い効果が見込める東アジアからのインバウンド（訪日外国人観光）振興にも努めたい。

■八田 人々が心豊かに生き活きと過ごせる地域づくりを目指し、地域住民と観光客の双方が楽しい観光の在り方を考えたい。

■杉恵 観光に関しても、都市や都心部の魅力が役に立つ。公共空間、例えば河岸緑地を活用してどうやって誘客するか。民間の方、特にボランティアの協力を得ながら都市づくりのプランを練っていききたい。

■藤山 とかく我々は空間設計を考えがちだが、本当に必要なのは、どういう時を過ごせるのかという時間設計。観光も一緒だと思う。

■折登 観光については休養、保養をとる滞在型の観光の推進も考えられると思う。

■田中 自然に恵まれ住民が落ち着いた生活を営んでいる地域であることは、平凡だがこの地域が全国に誇れるコンセプト。中国地方はとりわけ少子化高齢化が進んでいるが、先進的な地域の包括ケアや介護システムがどんどん生まれており、地域の支えの機能を生かしながら公的に支援していけばモデル地域になりうる。もっとも医療も福祉も多くは公的依存サービス。この地域に豊富な森林・海洋資源を生かした産業の育成、また基盤的・先端的な産業のでこ入れも必要だろう。

■伊藤 農業中心の時代には津々浦々に分散して生活してきたが、産業構造と人口構成は大きく変化している。これにあわせて、たとえば地域のゾーニングを組み替えることが必要だ。

■谷口 切り口としてのテーマに挙げたいのが、まず環境と経済の両軸を満たす戦略。例えば二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）の排出権取引といったもので中山間地域に財源が得られるかもしれない。2つ目は国内外との円滑なインターリージョナル（地域間）連携。3つ目に人口減少に伴う空間計画。さらに計画推進の担い手がいるのかという問題も提起したい。

■樺本 地方があるから東京が豊かなのと同じように、山陰側がしっかりすれば山陽側も豊かになる。これもまた循環だが、そういったことも一つのテーマとして重要だろう。本日は、ありがとうございました。